

あべこべ世界の貧民街に生まれ変わったので、ギャングのボスを目  
指す

山崎春のパン祭り

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

贅沢には金がいる。貧民街から出ていくには金がいる。学校に行くにも金がいる。救急車を呼ぶにすら金がいる。この世のすべてには、金が必要だ。

だが金を稼ぐには、この街ではヤクを売る以外の選択肢はない。ならば、この道突き通して、俺はギャングのボスを目指す。

そんな話にしたい。

# 目次

## シーズン1

第1話	Shit Hole	1
第2話	Night Life #1	8
第3話	Night Life #2	18
第4話	Normal Day	21
第5話	Regular Meeting	27
第6話	Fucking Nuts	38
第7話	Mean While	47
第8話	Life's a Bitch #1	56

## シーズン1

### 第1話―Shit Hole―

1

合衆国西海岸に位置するカリフィア州、エンジェル郡南にある City of Freedom フリーダム市は貧富の格差が激しく、犯罪率が合衆国で最も高い。また現在の合衆国のストリート・ギャングは、ほぼすべてがここから生まれたと言われ、別名マザー・オブ・ギャングスターと呼ばれている。

そのため貧民街では黒人4、ヒスパニック3、アジア2、白人1の割合でひしめき合っているこの街で、30歳まで生きられたら長生きと、毎日必ずどこかで銃撃戦が起こり、どこかで誰かが死んでいる。合衆国は、どこかの国が核兵器を隠し持っている、世界平和の為に民主主義の輸出に忙しく。

州と郡は完全にここを放棄し、むしろ逆に犯罪者を送り込み、いつも流刑地にしようとする傾向がある。

そして、最後の頼みの綱であるフリーダム市警察は、とつくに腐敗し、賄賂、人種差別、不法逮捕、容疑者の虐待に怠慢になりながら勤しんでいた。

そんな、国にも、神にすら見放された都市の貧民街に転生して早15年。俺は今日も他人の不幸を糧に、なんとか生き長らえている。

2

「おい、ジョージ。ジョージ・ミナト」

貧民街のストリートの側に止まっている車中で、女の声でのファック・ザ・ポリスのギャングスタ・ラップが流れ、この世界では N・W・A も女性なんだと感想を持っていたところ、隣から自分の名前を呼ばれたので、声の主を見る。

「ああ、なんだ？ デミ」

運転席に座り、タバコを口に咥えていたデミ・マルタ・ヒメノは、20歳のアジア系とヒスパニック系のハーフで、目は大きく鼻も高い女優顔の美しい女である。

赤と黒が混ざったショートボブの髪、首には十字架のチョーカー、上はヘソ出しの白のタンクトップに、下ホットパンツ姿。

そして、体のいたる所にタトゥーがあり、特に目立ったのは、彼女の右腕にあるハートマークに囲まれた『R. I. P. Frances  
ca Life Goes On』と書いてある。

フランチェスカ。孤児だった自分によくご飯をくれて、裏の世界の事について色々教えてくれた良いやつだったよ。2年前のあの抗争さえなければ……。

「……なに、見てんだ？ お前」

「フランチェスカの事について、思い出してたんだ」

フランチェスカ。その名前を出すと、デミの顔に悲痛の色が見えた。と同時にしまったと思った。

「ああ、お前にとってあいつは、母親見たいなもんだんもな」

「デミにとっては、親友だよな」

「ああ、そうだな」

二人の間に沈黙が流れた。

「つつ、いつまで感傷に浸ってもしかたねよ、死人は生き返らねえんだから」

「うん」

デミは、俺が座る助手席の外を見つめ何か気に気づく。

「おい、客だ。客が来たぜ」

俺も、助手席の外を見ると、40代のアジア系の女性がゆつくりとこちらに、近づいてきた。

「デミ」

「おう、言われなくても分かってるよ」

デミは、サイドブレーキに置いてあるグロックをそのまま握る、グロックはトリガー・セイフティなため、セイフティを外す必要はない。

こういうのは、何事も用心が大事である。お客様は神様とよく言われるが、それは精神が普通の人のみが適応される。

俺たちが扱っているお客様は、むしろ悪魔と言っても過言ではない。例え相手が徒手空拳だとしても警戒するべきだ。

窓ガラスを数回ノックされ、俺は窓を半分開けた。

「なんだ？」

「スノーはあるか？ 3gほしい。」

スノー(雪)。それはここでのコカインの隠語だ。

「約6万円500ドルだ」

俺がそう言うと、女は五、六年前はさぞ美しかったであろう顔を歪ませ、まるでコーヒーの様な黄色い歯を見せた。

「そ、そんな!?! 前は約3万6千円300ドルだったじゃないか!?!」

「上がったんだだよ。分かるだろ？」

「た、頼む！ まけてくれ！ せめて、400、いや450でも良いから！」

ほら、来た。

「良いか？ 俺たちは下っ端であくまで、売っているだけであって、仕入れも売れ値も上が決めてんだよ。出来るわけないだろう？」

「で、でも!?! たった3gなんだろう？ ちよつとぐらいまけても良いじゃないか？」

「じゃあ、聞くんが、そのたった3gに躍起になっているのは誰だよ？」

女は言葉が詰まった。そして、突然俺の髪を掴もうとする。しかし、それよりも先に目の前をデミのグロックが横切った。

「おい、落ち着け。男見てえな事言ってるじゃねえよ。払えなえなら帰れ(yo, calm the fucking down dude. don't fucking act like a fucking man. if you can't fuck king pay, go the fuck home)」

ファツキンを接続詞にして、男見てえな事と相変わらず慣れない言葉だが、この世界では正常である。

「あ、ああ。ごめん。すぐに帰るよ。兄ちゃんも悪かった」  
手を上げる女の謝罪に俺は、頷いた。そして、彼女は去っていたのを見て、デミは、背もたれに体を預け、ため息を吐いた。

「デミ。今のは男性蔑視だよ」

「うるせー……おい、ジョージ」

軽口を叩く俺に、デミは優しく俺の頭を叩いた後、一転して硬さをおびる声になった。

「なんだ？」

「お前は、吸うなよ」

「言われなくても、分かってるよ。毎日あんなの見て、誰が吸いたんだよ」

「なら良い」

「てか、それを言うとデミも、タバコを止めろよな」

「やだね」

そう言っつて、デミはタバコを大きく吸い煙をためて、俺に吐いてきた。

「うわ、くっせえー、俺が受動喫煙で、肺がんになったらどうすんだよ」

言っつた後、またしまったと思った。

「カブロン<sup>バカヤロー</sup>。そんなもんになる前にどうせ、……誰も生きて居ねええよ」

フランチエスカが死んだ後、デミの命を軽視する発言は、より一層酷くなり、諦観していた。

母は監獄で刺されて死に、父は病死し、姉は喧嘩で殴り殺され、その上親友の死は、彼女に一時期自殺を考えさせた。

それはこの街に生まれ育ったある種の、宿命なのかもしれない。

「大丈夫。俺は絶対に死なないよ」

俺がついた明確の嘘に、デミは目を涙で濡らした。

この街に生まれた以上、出て行けなければ、他殺か自殺以外の選択肢はない。それが速いか遅いかだけである。

「本当か……？　嘘をつくなよ」

デミは、自分の額を俺の額にくっつけて、目を見据えてくる。突然近づくと可愛らしい顔に、一瞬心臓がドキツとした。

「嘘じゃない」

「家族も親友死んだ私には、もうお前しかいない。私はお前がまだ生きていたから、自殺を思い留まったんだ。もし、お前が死んだら、私は死ぬよ」

暗く、底が見ないデミの目は、明確に俺を捉えていた。

「ああ、分かっている。俺たちは一蓮托生だ。もし、デミが死んだら、俺も死ぬよ」

「……うん。嬉しい」

デミが死んだ場合に、自分に自殺する勇気なんて無いのに……。つくづく自分はクズだと思う。

「あ、曲のフックが来たぜ！ イエー！ イエー！ ファックザポリス！ リス！ イエー！ イエー！ ファックザポリス！」

「う、うん」

リズムに乗って頭を振るデミに、俺は苦笑いした。

まるでさつきまで何もなかった様に別の話をするデミに、俺は驚かない。

デミがああなるのは、フランチエスカの死後、基本俺の死が話題になった時だけだ。それさえ気をつければ、いつも通り口が汚く、よくふぎける洒落な良いお姉さんである。

それから、次々に来る客をさばいて居ると、デミは1ブロック先に居る二人の20代のヒスパニック系女性を観察していた。

「おい、ジョージ。あれ」

彼女の真剣な声に、俺も彼女らを観察すると、明らかにヤクを売っている。

「ああ」

助手席のグローブボックスからベレッタM9を取り出して服の下に隠す。

デミはエンジンをつけて、ゆっくり車を動かし、彼女らに近づき、運転席側の窓を開けた。



「おい、お前ら。肝が据わってるな？　おい。ここが  
Engelthugs  
エンジェルサグスのシマだと知って、そんな事してんのか？」

俺たち下っ端には、自分の安い生命を張って、こいつらの様に無断  
で人のシマでブツを売るを輩を、教育するのも仕事の一部である。

「は？　エンジェルサグス？　なにそれ、聞いた事がねえな。な  
？」

二人は見合って、明らかに小馬鹿にして笑いあっていた。

確かにエンジェルサグスは、最近出来た50人程度の小さなスト  
リート・ギャングであるが、それでも、周囲のストリート・ギャング  
には、好意や敵意はさておき認識されている。

と言う事は、このバカどもは……

「お前ら、この街のやつらじゃねえな？」

「そうだが？」

どこか、こちらを舐めて居る連中は半笑いで聞いてくる。

「私は、オトナ、だから、あと一度しか警告しない。今すぐブツのを  
売のをやめて、この街から出ていけ。分かったか？」

「と、オスガキを連れた子籠もりしている、オトナのパパに言われて  
もね」

前世では、男なのに女の娘と呼ばれたに相当する物なのだろう。

舐めたれたら終わりのこの世界では、絶対に舐められては行けな  
い。デミのこめかみからプチンと、何かが切れる音が聞こえた。

わー、くわばら、くわばら。心の中にそう呟きながら、俺はベレッ  
タM9を服の中に隠しながら、ドア開けて外に出た。

狙うに丁度いい場所を立つ。幸いこのバカどもは、子供だからとこ  
ちらを警戒する事はなかった。

セーフティを外しながら、ベレッタM9を外に晒して、運転席から  
少し離れた所に居る一人に照準を合わせる。そして、相手が反応する  
前に、躊躇する事なく引き金を引いた。1回、2回。乾いた音がスト  
リートに反響した。

周囲の人々は銃声を聞いて、すぐさま続々遮蔽物に急いで隠れ始め  
る。

二人のうち一人は、一瞬何かが理解出来ずにいたが、すぐに背後に手を回して、隠していた自分の銃を取り出そうとした。が、その前に「サプライズ！ マザーファッカー」と、微笑むデミのグロックで、その知能が足りない脳漿を地面に晒すことになった。

俺はデミと自分の薬莢を地面から拾い、車に戻る。

またセーフティをかけて、ベレッタM9を助手席のグローブボックスに戻した。

自分の手を見る。この世界に生まれて15年。既に6人以上は殺した血に濡れた手。

前世の価値観では考えられない、この命が軽い街の底なし沼にどっぷりハマった、既に人を殺して何の感慨も持たない。成れの果て……

「はっ！ 思い知ったか?! 舐めやがって！」

デミは、アクセルを踏みしめ、車を急発進させて、声高らかに叫んだ。

「はっはっはっ！ そうだな！ ざまあみろ！」

人を殺した後笑っている俺は、きつともう手遅れで、どこか壊れているかもしれない。

……

……

…

そうして、犬の吠える音と銃声が常時なり響くこの街では、今日も誰かが日常的に死んでいた。

自分の家であるトレーラーハウスまでの、移り変わっていく帰路の風景を眺めながら、車内からは2 Pac の Life Goes On が流れ、俺はまたフランチェスカの事を思い出していた……

## 第2話 | Night Life #1 |

1

カリファイア州エンジェル郡南にあるフリーダム市は、直線だけで描かれたニワトリのような形で、人口61万近くも擁する大都市である。がその内、中産階級は約9万1千人しかおらずほぼ半分が白人であった。

彼ら中産階級は、警備が整った豪華な住宅街、カジノやホテルなどがある北に住んでおり、ニワトリの首を思わせる場所を横一線のマリアブルバールドが境目に、南は奥に行くにつれて、道に散乱するゴミ、路上や橋の下にあるホームレスたちのテント、落書きやストリートアートなどなどは、まるで北と南が別世界の如くだった。

そんなマザー・オブ・ギャングスターとも言われる現在のフリーダム市での、ストリート・ギャングの勢力図はいわば群雄割拠である。全国にかけて、エンジェル市にも勢力を持つ2大ストリート・ギャングである赤をシンボルカラーにしたアフリカ系の『ヴァイス・ローゼズ』、青をシンボルカラーにしたラテンアメリカ系の『スナグス』は長年血みどろの戦争状態にあり、フリーダム市では毎日緩慢的に死傷者を出し続けている。

その間に乗じて他の中小規模のストリート・ギャングは、己が第3番目の王に成ろうとその座を狙い、毎日結成、抗争、統合、分裂、結成、抗争……とエンドレスにその不毛な状態を繰り返して、主戦場のフリーダム市は混迷を極めていた。

住民たちはみな困憊した目で嘆く、この地獄は何時に成ったら終わるのか、神はいないのか……と。

2

デミは、車を発進させて、無断で人のシマで麻薬を取引していたバカどもを、射殺した第43ストリートから、大通りである

エル・インペリアルアヴェニューに進み、それから約20分。

ラジオから次々と流れるオールドスクール・ラップを聞きながら、眺めていた帰路の風景は元々ではあったが、一段と見るからに荒れていっていた。

アスファルト舗装された地面はひび割れ、壁にはスプレーで書かれた汚い言葉の落書きやストリートアート、駐車された錆付き壊れた車、路上に散乱するゴミの側には麻薬中毒者たちがたむろしている。

またヤクのやり過ぎなのか全裸で走っていたり、半裸で横断歩道の上で横になりながら大声を出したりなど奇行を行う者が多く、チャリテイ施設の近くにはブルシート製のテントなどがズラツと並んでいた。

そんなホームレスたちの家やジャンキーの成れの果てを見て、俺の心には彼らへの同情の一欠片もなく、そもそも同情は心に余裕がある者が戯れに持っている物で、むしろ自分より下の惨状を見せられた俺の考えは、一つしかなかった。

例えば死んでもああは成りたくない。だから、もつと金を稼ぎ、上に登らないと……。俺は拳に力を入れて、改めてそう決心する。

港湾都市であるベンチ市から屈指の世界都市でもあるエンジェル市を結び、クラウン市までの110号線州間高速道路の橋下を通過して、更に少しすると、自分とデミの家で、トレーラーハウスがある、市の一番南の第61ストリートに入った。

そこはトレーラーハウス専用の駐車サイトで、なので当然トレーラーハウスだけが並べられていて、白、黒、赤、と色々な色、様々なタイプがあるが、そのどれもが錆びついており、年代を感じさせられた。

デミは車を止めて、エンジンを消した。

「着いたぜ、汚らしくもファツキン愛しい我が家だ」

デミのジョークに、俺は口をほころばせる。

デミは自分のグローックを、俺は助手席のグローブボックスからベレッタM9を取り、ズボンの後ろに隠した。

今日の売りをリユックサックに詰め込み。そして、車の中に忘

れ物はないか一通り確認して、車から出た。

外から急に熱風が襲いかかってきて、空調がきいた車の中で涼しく過ごしていた体は、またたく間に熱によって全身を侵され、俺は眉をひそめる。

エンジェル郡の気候は、基本年中暖かく、冬でも9℃を割ることは稀で、夏では40℃を超える事すらある。その為、服装は常時薄着になる。

結局なにが言いたいと言うと、ここは夜でもクソ暑いと言う事だ。デミと一緒に舗装されていない砂利道を歩く。

フランチェスカ亡き後デミは、俺の義姉兼保護者と言う事で、俺は彼女と現在一緒にトレーラーハウスに住んでいる。

「……もう、たくさんだ！」

突然ある一つのトレーラーハウスのドアが開き、中から20代後半の黒人の男が、そんな事を叫びながら出てくる。

「おい！ 落ち着けてー！」

彼を追うように、もう一人20代後半の黒人の女が出てきた。

トレーラーハウスの中から子供の泣き声が聞こえてくる。

「僕は！ 僕にはっ！ もうこんなのに耐えられないっ……！」

男はまた中に入り、6歳ぐらいの泣いている男の子の手を繋いで出てきた。その後ろには、10歳ぐらいと8歳ぐらいの女の子たちがいた。

「お前なんかに出会わなければ、僕もここまで落ちる事は……！」  
ヒステリックになってそう言う男の手には、ナイフがあった。

「お、おいっ！ ま、待ってー！」

止める女の声を、興奮状態の男には聞こえず、男はナイフを女の腹に刺した。2度、3度。9回を超えた所でようやく男は手を止めて、崩れ落ちる女を見て、自分がした事に信じられない表情になって、血がついたナイフを落とした。

そして、消沈した男は俺とデミに気づいた。

「あー、なんだ。私たちは、サツなんかにチクつたりしないから安心

しろ。まあ、と言つても誰かが通報してサツが真面目に捜査するかはさておき」

デミの言葉に、男は信じたのかは分からなかったが、小声で礼を言つて、泣いている子供たちの手を繋いで早足で去っていた。

子供の泣き声が遠のつて行き、聞こえなくなった所で、デミは、砂利の地面を血で染めていく女の死体を見る。

「まったく。本当になんて、汚らしくも素晴らしいマザーファツキンラブリーな我が家だ」

皮肉たつぷり込められた呟いた言葉に、俺は大きく頷く他なかった。

デミの言う通り、ここは素晴らしい。素晴らしい過ぎて、逆に吐きそうであつた。

### 3

デミと俺の家は、それから更に5分歩いて着いた。白色で、特に目立った特徴はなく、ペンキが剥がれ落ち、錆びついた普通のトレーラーハウスである。

ヤクを売っているからある程度の稼ぎはあるので、ある時引越しの話題が上がったのだが、容疑者の虐待が趣味なサツが中途半端にうるつく場所より、まったくサツが来ないこの方が比較的安全と言う事になり、結局引越さなかった。

デミはカギを挿して、すぐに違和感に気づいた。通常ロックが掛かっていれば2回転が必要な所、1回転で済んでいる。記憶が確かならば出て行く時ロックをかけていたはず、と言う事は……

彼女は俺を見て頷いた。俺とデミは、それぞれの拳銃を取り出して、俺はドアをゆつくりと開ける。

デミは、ドアの隣にあつたスイッチを押して、警戒しながら明かりをつける。中はキレイに片付いているとは言い難く、テレビとゲーム機の側には食べ終わったカップ麺があり、キッチンの蛇口の下には、洗われていない皿あつた。

そして、ベッドの上には……

「つたくーお前ら、明かりも付けずに人ん家でなにやってんだ」  
そこには、3人の女性が横たわっていた。彼女たちを見てデミの緊張は消え、呆れた口調でそう言っつて、グロックをテーブルの上に置いた。俺もベレッタM9をテーブルの上に置いて、家の電子金庫に今日の売り上げを入れながら呆れていた。

すると、ツンとした刺激臭が鼻孔をくすぐった。この匂いは……俺は、この匂いに覚えがあった。

それは、この街、いや、合法的に吸うことを許されたこの州に住んでいれば、毎日嫌でも目につき、鼻にこびりつく。マリファナ<sup>W d</sup>である。

「……あ、ん？ おー、やっと帰ってきたか。ホーミー<sup>相 棒</sup>」

デミはいつまで経っても返事がなかったので、ベッドを蹴ると、1人が目をトロンとさせて起き上がりそう言った。

彼女の側には彼女らの拳銃、そしてさっきまで使っていたのだろう、ガラス製の青色のスプーンパイプが置いてある。

他の2人も続々とデミに気づき起き上がった。

「よう、元<sup>W h a t ' s u p</sup>気？ ドッグ<sup>相 棒</sup>」

「へい、ホーミー」

彼女らは、半年前にエンジェルサグスに入る時に話しかけられ、それからお互いに年齢も近く、ハーフと言う事ですぐに仲良くなった。

外国留学すると、その国で自分と同じ国の人と仲良くなれ易い様なものなのだろう。人は見知らぬ場所に行き、自分と共通点がある人と会うと安心し、すぐに仲良くなれるらしい。

と言っても、おそらくデミの中の彼女らのポジションは親友とまで行かなくとも、友達であろう。そもそも親友を失った悲しみを経験し、それがトラウマになったデミが、新しく親友を作れるかは疑問であるが……。

彼女らのそれぞれの名前は、エリカ・ヤン<sup>Y</sup>・マックイーン、ソフィア<sup>K</sup>・カーミナ<sup>P</sup>・ペレイラ<sup>P</sup>・ギャロ、アリス<sup>J</sup>・ジュリア<sup>J</sup>・スミスである。エリカ<sup>Y</sup>・マックイーンは、白人とアジア系のハーフで、赤毛のロングヘアやチャーミングポイントであるそばかす、そしてマックと

苗字についてる事から彼女がアイルランド系の血を引き継いでいる事は初見でも分かる。

ソフィア・K・P・ギャロは、ヒスパニック系とアフリカ系のハーフで、黒の長い太めなコーンロウをポニーテールにしている。デミより1歳上で、ここでは一番年上であるが日本の様な厳しい上下関係はなく、同齡の友達の様になっている。

アリス・J・スミスは、3人の中で一番年下で、アフリカ系と白人のハーフであるが、姉弟全員父のアフリカ系の肌の色を引き継いでる事が一見で分かるが、彼女だけ淡雪の様な白い肌は、母の浮気疑惑が上がり、暫く家族内で疑問になったが、DNA鑑定によるとしつかりと彼女は父と母の娘であつたらしい。

またアニメが好きと言う事が高じて、金糸の様な金髪を短いツインテールにしている。

ちなみに、俺は短髪とアジア人の平凡な顔立ちで、自分では前世が日本人と言う事で勝手にミナトと日本の苗字を名乗っているが、詳しい人種は分ならず、孤児院に居た時に付けられた名前はジョージ・リーであつた。まあ、様々な人種が混ざり合うここ合衆国では、そんな事はどうでも良いが……。

さて、話を戻すが、そんな彼女らもデミに負けずとも劣らない容姿端麗の美人である。

エリカは20歳、ソフィアは21歳とデミと同じ20代であり、アリスは俺より2歳上で17歳であつた。

前世と合わさり精神年齢は彼女らより年上であるが、俺としてはエリカとソフィアは姉の友達である感覚が大きく、お互いにアニメ好きと言うのも一因であるかも知れないが、今生の実年齢と近いアリスの方が一番仲が良い。

「てめえらのケツ穴にホーミーだよ、ファツキンビッチども。人ん家に勝手に入って、そして勝手にハイに成りやがってよ」

罵声を浴びせながらも、それでもデミは彼女ら一人ずつと手慣れた仲間内のハンドシェイクをした。俺もまた彼女らといつものようにハンドシェイクして挨拶する。



「仕方ねえだろ。あたしたちの家の事情知っているだろう？ それにお前が何時でも使って良いって言ったんじゃないか」

一番年上のソフィアが代表して言った。

彼女らの父と母は皆幸いにも存命中であるが、それぞれが尽く刑務所か、アル中か、ヤク中かで、毎日絶好調に朝から晩まで喧嘩中である。そのため、彼女らはほとんど家には帰っていない。

「だとしても、せめて事前に言えよな、強盗が入ったと思っただよ。てか、お前らどうやって入って来た？」

「え、デミ、家のスペアキーをあげた事を忘れたのか？」  
俺がそう言うのとデミは、

「あぁー」

と、パーティーで彼女らの家族についてを聞いて、酔った勢いでスペアキーを渡す自分の姿がぼんやりと浮かんでいた。

「……うん。ま、いっか。私とジョージが居ない時に家を守ってる門番だと思えば」

「だろ？ 安心しろ。お前らが居ない時この家はうちたちが守ってるよ。それより、どうよ？ やるか？」

エリカはそう言いながら、側にあつたスプーンパイプに新たな乾燥マリファナを手で摘んで入れ、ライター共に俺たちに差し出してきた。正確には彼女らは俺がマリファナを吸わない事を知っているの  
で、デミにはあるが。

「フアツクイエス」

デミはスプーンパイプとライターを手に取り、ライターで乾燥マリファナに火をつけて、出てきた煙をパイプの吸い口から吸い、その成分を肺から脳へと届ける。そして、デミは煙を味わう様に、ゆっくり煙を吐き出した。

「じつだっ」

エリカの問いにデミは、すぐには返事をしなかった。3秒、5秒と時間が流れていく。

「……………あぁ、やっぱ最高だぜ」

「だろっっ」

数秒遅れて返事をするデミに、エリカは気にすることはなかった。なぜならこれは、マリファナを吸うと起きる現象で、デミが言うには、吸った後はリラックス感があり、すべての些事から解放された様な心地よい感覚に陥り、時間がゆっくり動いている様に感じ、頭がボーッとするらしい。俺は吸ったことは無いから分からないが。

「次はあたしだな」

ソフィアはそう言って、パイプをデミの手から取り上げ様とした寸前。エリカに止められた。

「バカ、うちはまだやってないんだから」

「はあー、わったよ。次は本当にあたしな」

ソフィアは渋々口調で言った。

「あ、そう言えば、今日の稼ぎはどうだった？」

ソフィアはエリカが吸っているのを羨ましく見ながら、デミに聞いた。

「あー全然ダメ、<sup>約21万円</sup>1700ドルしか稼げなかった」

「その9割は上に渡すから……」

「<sup>2万1千円</sup>1700ドルだよ。はあー命をかけてた1日がこれだよ。そっちは？」

「こっちは……」

ソフィアとデミ、そしてエリカたちは、最近の稼ぎがどうのこうのと日常の話をし始めたので、興味のない俺は移動しソファに座り、テレビをつけた。

テレビでは、フリーダム市の市長である。ジェニファー・ドロタ<sup>D</sup>・イーストマンがスピーチをしていた。白人の58歳で、そしてもうすぐ任期の終わりを迎える彼女は、しゃがれた声で、耳を集中しなければ聞き取れない英語で、この市の南部を変えるとか、貧困率や犯罪率を改善する対策を打ち出すとか、ギャングには断固して立ち向かうとか、それを公約するとか。

美辞麗句と甘い言葉だけを並べて、南部の票を集めて、絶対に次期を狙っている事は見え見えである。

俺の命をかけても良いが、今こいつの言ってる事は、当選した時に

はまるで言っていなかった様に出てこなくなり、食言するだろう。

可能ならば、今こいつがスピーチをしている安全な北部から拉致して、ここ南部でその続きをして欲しいものだ。

俺は、無然たる表情で大きく長いため息をして、スマホを手に取り、出てくる情報の中身を読まず、適当に下にスライドした。

「うわー、ファツキンクソババアじゃん」

すると、かわいい眉間にシワを寄せて、うへーと言う様な口調で、口汚く言いながら隣にアリスが座った。

「嫌い？」

offuckingcourse

「当然。よ。このババア前もこんな事言ってたんだよ？」

「だろうな」

「今期絶対に落ちてほしいわ、このババア」

合衆国では選挙権年齢は18歳なので、俺とアリスは投票出来ず指をくわえて、その結果を見るしか出来ない。

「まあ、無理だろうな」

俺がそう言うと、アリスは驚いた顔で聞いてきた。

「は？ なんでよ？」

「なんでって、そりや……フリーダム市だからな」

「あー。なるほど」

フリーダム市。その一言ですべてを説明出来た。フリーダム市だから、当然不正が起こり、こいつは当たり前の様に当選するだろう。

「もしこのババアが当選したら、絶対に暗殺しに行くわ」

「はっはっはっ、頑張れよ」

アリスの冗談に、笑いながら適当に返す。

「あ、今期のアニメ見た？」

アリスが思い出したかのように、唐突に話題を変え聞いてきた。

「まだ。今期何か面白いのあった？」

「えっと、ね……………」

それから、しばらくアリスとアニメの話題で花を咲かせていると、突然、

「よしーーーじゃあ行くぞー！」

ソフィアが、ソファに座る俺とアリスにも聞こえる様に大声で言った。

「行くってどこにだよ？」

びっくりしながらもデミがそう聞くと、

「「ストリップクラブだよ。アミーガ」」

まるで事前に仕込んでいた様に、なぜか彼女たちの会話に参加して居なかった隣のアリスを含み、3人は下品な顔を浮かべてデミに対して異口同音に言い、そんな事が聞こえた俺の顔は大いに引き攣った。

### 第3話 | Night Life #2 |

1

裸の男たちが妖艶にポールダンスを踊る姿など見たくなかった俺は、デミたちについて行かず、現在一人ソファに寝転びながらテレビを見ていた。

テレビでは宇宙特集が放送されていた。特に集中して見てる訳ではないが、相対性理論、宇宙の起源、宇宙人は存在するのかなど、どの世界も変わらない問題は、ある意味宇宙人俺には実に興味深かった。

そもそもこの合衆国の言語も英語で、スペイン語やフランス語など元の世界同じ言語が存在し、世界地図、そして今住んで居る星の名前を太陽系地球と言うところすら同じなのだ。

パラレルワールド？ 未来？

俺が転生したと言う事は、魂は存在する？

この世界に生まれた頃、何度も考えた様々な答えのない問題が頭の中を駆け巡るので、俺は考えるのをやめた。明日にでも死ぬかもしれないのに考えたって仕方ない。

俺はテレビを消して、目を瞑った。あー、あの懐かしき平和な日本に帰りたい。

2

赤を基調にした店内は、ミラーボールが回転しながら妖しく彩らせていた。その中央にはゆったりとした音楽をバックグラウンドにし、ポールを掴み宙に浮いている影があった。

彼は、ポールダンスと共に収縮するその筋肉を観客に見せつける、黄色い歓声が上がると、

「やっぱ、質が悪いな」

だがテーブル席に座って、見ていたデミからは不満の声が上がった。

「南部ではストリップクラブは、この1店しか無いんだから贅沢言うなよな」

それは、さつきまで黄色い歓声たちの一員だった隣のエリカに届いた。

「そんな事ぐらいわってるよ」

エリカの言葉を聞いてから、一旦は受け止めたデミだったが、それでも愚痴は止まらなかった。

「……ったく。見ろよ。なんだあの腹筋のないたるんだ腹は、私の方がまだあるわ。そしてあれに金を払って、自分の前で踊ってる姿を想像してみる。だったら、たまにジョージの腹筋を見れる家の方がまだまじだよ」

「へー。ジョージってあんな可愛い顔して、腹筋あつたんだ」

「ああ、いつ鍛えたのかは分からないが、見たらキレイに割れてたんだよ」

エリカの頭にジョージの顔が浮かび、彼の日頃服の下に隠れた引き締まった筋肉を想像した。

「でか……? お前。まさか、ジョージの着替えてる時に覗いたのか?」

「ちげーよ! あれはっ!」

「なに、なに、なんの話し?」

トイレから帰ってきたソフィアとアリスが、話に加わった。

「デミが、ジョージが着替えてる時を覗いたって話」

「うわー、まじかよ。引くわー」

「だから、ちげーって! てめえら殺すぞ! だからっ! あいつはっ!」

そこまで言っつて、デミの口は急に止まり、ポケットからタバコを取り出し、一本啜え火を付けた。煙を吐き出し、一服してやっと話の続きをした。

どうやら、シリアスな話の様だ。エリカとソフィアとアリスは察して、真剣な顔になった。

「はあ……あいつは、なんて言うか……貞操概念がバグってんだ

よ。昔フランチェスカが言うには、出会った当初は痩せ細って、体も青あざまみれだったらしいし。多分孤児院に居た時に、小さい頃から性暴力を受けてたのが原因だよ。だから、あいつはそこら辺が疎いんだよ。教えてやっても腑に落ちない顔になるし」

白人とアジア人の、どっちもこの街ではマイノリティのハーフであるエリカは、昔虐められていた苦い記憶を思い出す。自分がそれほどなのだから、同じアジア人の血があり、男性な上子供だった彼が受けた仕打ちは想像を超えるものだろう。

「なるほど……まあ、今幸せなら良いんじゃない。貞操概念とかそこら辺は、ゆっくり教えてやろうよ。私たちも協力するから」

エリカが後半言ったセリフは、少しいやらしい意味を込めてデミを怒らせ、雰囲気を変える為に言ったが、デミは気づかないままだった。

「ああ」

「ささ、シリアスな話題もこれぐらいにして、飲め飲め、もうその東海岸のネオヨーク市のやつら見たいな、いっつもクソを我慢している様な表情を変えろ」

エリカの困った顔に気づいたのか、ソフィアが言葉を屈折させずに直接言った。

「……ああ、そうだな。あいつらは未だに連合王国と独立戦争してるからな」

「ははは、違くない」

笑いながら4人は、乾杯をしてグラスの中身を一気に飲み干した。アリスが未成年なのに酒を飲んでいる事は、ここでは誰も気にしない。

飲み干した後、彼女らはどの男に個室で踊って貰うかなどを会話していた。彼女らの夜はまだ始まったばかりだった。

## 第4話―Normal Day―

1

「あゝ ああー、あつたまクソいってえー、吐き気がするうー」  
ストーリーに止められている客待ちの車内でアルコールの臭いが漂い。デミは助手席で上を見上げて辛そうに言った。

ラジオからは当然ながらギャングスタラップが流れ、『ギャングスタは生きる ギャングスタは死ぬ』『ギャングスタは密告しない ギャグスタ泣かない』とリリックが続いている。

「……」

昨日デミたちが家に戻ったのは、もう午前5時を回っていた。そんな彼女は現在二日酔いに苛まれている。だから、彼女を叩き起こし、運転させるにも事故りそうなので、免許証は持っていないが、最低限程度の運転は出来るので、少ないとも今の彼女よりましである俺がハンドルを握った。

「あー、頭がクソ痛いよお〜！ 辛いよ〜ジョージ〜」

デミが彼女らしくない、甘い声を出して言った。

「……」

今日も仕事があるのに、朝帰りな上飲み過ぎて二日酔いとは、良いご身分である。

「ジョージってば〜、聞いているの〜?」

「……」

ワイワイ騒ぐ彼女を俺はジト目で見つめた。

「なんだ? その顔は? 便所か?」

「ハァー、今日何曜日か、忘れたのか」

「どうやら、今日が何の日かを忘れた彼女にヒントを出す。」

「木曜だけど?」

それでも、日付まで言ったのに思い出せないデミに俺は答えを言った。

「2週間に一度の集会」

「ああ! そうか! うわ、頭痛すぎて……めんどくせえー 行きた



くねえー」

「いや、ダメだろ。行かなきゃ。それにヤクが切れかかってるんだ。補充の為にも行くしかないんだよ」

「……まじか……ハァー。なんで今日は木曜なんだよ……畜生う」  
まるで月曜日の到来を呪うサラリーマンの様にデミは言った。

「うん。飲み過ぎたデミの自業自得としか言いようがない」  
「……………くっこの野郎っ」

そう言つて、デミは酒の臭いが漂う体を運転席にいる俺に近づき、思いつきデコピンして来た。

「いいーつつつつ。なにすんだよ!」

なかなかの痛みが走り、大声で言う俺に、彼女は、

「いや、正論を言われて腹が立ったから」

こいつ。まじかよ。そうのたまう彼女に、俺の胸に少しずつ怒りが込みあがって来た。俺の変化に気づいたのか、デミは急に顔を寄せてくる。そして、そのまま顎を俺の肩にのせた。怒りは困惑へと変わる。

「うう。ごめん。ジョージ。そんなに怒らないでー。えええん」

彼女はなんと涙ぐんで謝って来た。暴力の後に謝ると言うまるでDV彼女の様な手口である。

俺は次第に冷静を取り戻した。うわー。そう言えば、デミ。酒の後って情緒不安定でめんどくさくなるんだ。と思ひ出す。まだ当然アルコールが抜けていない今は、そのめんどくさいど真ん中である。

「めんどくせー、分かったら。もう怒ってないから」

「本当に?」

「うん」

デミは困り眉で涙で濡れた目で見ってくる。

「でも、さつき。私の事めんどくさいってええ。うええん」

「そんな訳ないだろう。空耳だつて」

「え、でも。さつき確かに聞こえたよ。私」

うん。ガチでめんどくさくてだるい。この世界の女だろ。女々し

い……男らしい事を言うな。めんどくさい。やっぱり、俺はいつつものデミが好きだわ。

「だから、空耳だって、ほら、アルコールが抜けてないからまだ酔ってんだよ」

「でも、でも」

「ハア、デミ。お前、今日もう休め。ボスには俺が言ってくるから。あの人なら酔っている時のデミとしらふにいる時を分別出来るから」

「えっ！ まじ！ ありがとう！ ジョージ！」

「でも、しらふの時は覚悟しとけよ」

デミは俺に抱き着いていた。

こいつ。まさか……。

「デミ、お前」

「大好き！ 愛しているよ！ ジョージ！ うううええ……吐きそう……」

「お前！ ここで吐くな！ 吐くなら外で吐け！」

2

その後仕事をノルマまでこなすと、早々に切り上げて俺たちは家に戻った。よろめきながら歩くデミを支えながら俺は、確かにこの状態のデミを無理矢理仕事させるべきではなかった。と、後悔し、自責の念に駆られた。

車から売り上げを家の電子金庫の中にしまい込んだ後、デミをベツトに寝かせると彼女は直ぐに安らかな寝息を立てて眠りについた。横に目を向けると、アリスとエリカが寝ていた。こいつらもか。あれでも、ソフィアがいないな。朝の時はまだいたのに。

俺は気になって、彼女に電話をした。少しのコールの後彼女は出た。

『よ、ジョージ。What's up どうした？』

昨日はあまり飲んでいなかったのか、あるいはなかなかの上戸なのだろう、元気のあるソフィアの声が電話越しに聞こえた。

『さつき家に帰って来たんだけど、今どこ？』

『どこって、仕事だよ。仕事。』

俺はアリスとエリカを見ながら、ソフィアに聞いた。

『え？ まじで？ 一人で？』

『あ？ アリスとエリカはベットで死んでるから、あたししかない  
いだらう』

『まじかよ……』

一人でとか、危険性過ぎるだろ。

『なんだよ』

『えつと……そのだな、余計なお世話じゃなければ、手伝おうか？』  
『えっ!? あーいや、うん。分かった。つつつてもそこまでやる事  
はないぞ』

『うん』

『オーケー、少し待ってろ』

それから30分経って、家の外からブザー音が鳴った。思ったより  
早かったな。俺はベレッタM9を手に取り、後ろズボンに挟んで外に  
出た。

目の前に車が止めてあり、運転しているのがソフィアだと確認し  
て、ドアを開けて助手席に座った。

「よ、ありがとうな」

「よう。良いってことよ。仲間だろ」

彼女と仲間内のハンドシェイクをする。それから彼女が車を起動  
させると、ラジオから案外ラップではなく普通の曲が流れていた。

「良い曲だろ」

「え？ ああ」

今流れている曲について言っているのだろう。確かに良い曲だ。  
この曲を描写するなら綺麗で美しいくも悲しいだろう。

「なんて言うアーティスト？」

「お前と同じ名前でJ・O・j・iってんだ。もう最近この曲にハマって  
ずっと聞いているよ」

「へー、でも確かに、この曲はずっと聞いていたいのも分かるな」  
車を走らせてしばらくすると、彼女たちが担当するシマに到着した

様で、ソフィアは車を止めた。

「着いたのか？」

「ああ」

そして俺は銃を出して、周囲を警戒しだした。だが、ソフィアは1点だけを見つめて視線を外さなかった。気になって、彼女の視線の先を見ると、1人の小学3年生ぐらいの年頃であろうアジア系の女の子が、座り込んでスマホを見ていた。

「？」

確かに可愛いらしく、将来の容姿を容易に想像出来るが、それだけではずっと見つめる理由にはならないはずだ。あの女の子がどうしたのだろう。まさか？ 妹？ ソフィアには5人の兄妹がいると聞く。いや、しかし彼女はアジア系だ。

俺は素直にソフィアに理由を聞いた。

「あの女の子が何か？」

「ん？ ああ、わりい。言うの忘れてたわ。あの子。あたしたちの売人なのよ」

「え？」

「だから、ボスからあたしたちに売れてヤクが渡るだろう？ で、あたしたちはあの子に売れてヤクを渡す。分かったでしょう？ なんてあたしがそこまでやる事はないって」

「なるほど……」

これが理由か。色んなヤクを売る方法があるんだなど、素直に関心する。でも、まだ子……

「まだ子供じゃないか、とか言わないよな」

ソフィアがまるで俺の心の中を読んでいたようだった。

「……言わないよ」

「そうか。言っておくが、あたしたちの仕事を手伝わせて欲しいと頼んだのは、あの子だよ」

「……」

「金だよ」

なんで、とソフィアは再び俺の心の中を読んだかのように言った。

「親からお小遣いの金が足りなくて簡単に稼ぎたいとよ。金への欲は大人も子供も同じだな。それに子供っていうなら、お前だって同じでまだ15のクソガキじゃないか」

ソフィアは、俺の頭を慈しむように撫でながら言った。

「俺は……」

俺は前世があるから精神年齢は大人だけど、あの子はまだ……。

「いいか、あたしたちはギャングだ。言わば悪だ。まあ、この街では正義だったはずの警察も悪だが、それはさておき、あたしたちはヤクで弱者を食い物にし、必要となれば子供だって殺す。だろう？」

「ああ、そうだな……」

俺は頷くしかなかった。

それから、あの女の子がヤクを客に売り、足りなくなったらこっちに來てヤクを補充する繰り返しで午後に入った。もう既にソフィアたちのノルマはクリアし、時刻もそろそろ集会が始まる時間だったので、俺たちは、一旦家に戻り、電子金庫から売り上げを取り出した。ベットにはデミたちが未だに寝ていた。

俺とソフィアはお互いに呆れたため息ついて、ボスの家で行われる集会に行った。

## 第5話 | Regular Meeting

1

ボスの家がある第60ストリートは、そのほぼ全域が俺たちの所属するエンジェルサグスのテリトリーでもあった。

ソフィアが運転する車でストリートに入ると、入り口には黄色い色の旗が立っていた。

それはフリーダム市総勢およそ大小合わせて900組、14万人もいるストリートギャングを分別するためのエンジェルサグスのシンボルカラーで、俺たちも必ず服の中に黄色を入れている。今日はソフィアは黄色のハンカチを腕に巻き、俺は黄色の服を着ている。

なので当然このストリートの路上にいる人々もどつかの1か所に必ず黄色がある。

エンジェルサグスは50人しかいない小さなギャングなので、全員ほぼ顔見知りである俺たちは、窓を開けて彼女らに挨拶をしながら進んだ。

「……」

フリーダムシティ、マウスが巣くう私たちのハウス。床のウッドは腐っている私たちのフツド。頭が沸騰するほど下品なこの街で、

ダチは売り上げを奪われ、野垂れ死に

母はヤクにハマって、脳ト口死に、

姉ちゃんは、腕の注射跡でまともに職につけずに、イキイキと家の中でクソを垂れ流し

ライフに意味はなく、私はクスリを忌みながらも、生きるために今日も石を売り、マリファナをスモーク。

いやいや、これはジョークじゃなくて、私のリアルライブ。ペティ隣れみをくれるな、だって私はファミリーより大切なフレンドを見つけたから

ボスの一軒家前に着くと、ビートと共に観客に囲まれながらのフリースタイルラップショーが俺たちを出迎えた。

ラップに乗っている彼女らともあらがたハンドシェイクをして、家の中へと入る。

すると、すぐ目の前にソファに座りノートパソコンとにらめっこをしている人物がいた。今年で26歳の誕生日を迎え、黒いショートカットの髪に褐色の肌を持ち、その可愛いらしい外見に油断できない雰囲気を漂わせている彼女は、

「来たか、ソフィア。それと……ジョージだけか？ あ？……デミはどこをファックしてんだ？」

ボスであるアマンダ・キャロライン・フィリップスは気づき、巻きマリファナを唾えながらこつちに向いてそう言った。

「……二日酔いだよ、現在進行形でベツトの上で死んでる」

売り上げを渡した後俺がそう言うと、アマンダは呆れた。

「ハア、まあいい。私としてはセットの一人が集会に出て、売り上げを上納できて、スムーズに回れば誰でもいい」

アマンダが言ったセットと言うのは、3人以上からなる一組の、ギヤングたちの言い方だ。基本仲がいい同士がつるんでいる。

ちなみに、俺とデミのセットはもともとフランチェスカがいたが、彼女がなくなっただけで、彼女の替えは居ないと結局新たに人は入れずに、現在までそのまま活動している。

デミは最近ソフィアたちと、よくつるんでいるのだから、彼女たちのセットに入れてもらい、一緒にいた方がより安全なのだが、その辺なぜデミが2人での活動に固執するのか分からない。

ま、デミがいやって言うのなら、仕方ない。

「他のやつは？ もう来てるのか？」

ソフィアは周りを見渡した後、袋に入った売り上げをアマンダに渡しながらかいた。

「ああ、もうとつづくに来ているよ。先に行って待ってる。私は全員が揃ったら行く」

「分かった。行くぞ、ジョージ」

言いながらソフィアは歩き出した。

「うん」

「いや、ジョージは待ってくれ」  
ソフィアの後に付いていこうとする俺に、アマンダから声がかかる。

「? なんかにジョージに用なのか?」  
ソフィアはアマンダに聞いた。

「いやー、未だにこいつの使い方分からなくて、やははは」  
アマンダは自分のノートパソコンに指差ししながら、困り果てた表情でそう言った。

「なんだ? ボス。まだ使えこなせてないのか」  
「だまれー。これでも進歩した方だ。さっさと行けっ、お前には用はない」

「へいへい。じゃ、お先に。ボス、ジョージ」  
そう言うと、ソフィアは2階に上がって行った。

「……それで、ボス。どこが分らないんですか?」  
俺はアマンダが座るソファの隣に座り聞いた。ある程度彼女とのスペースを開け、視線を彼女のノートパソコンへと向ける。そこには沢山の数字が並んでいて、現在の状況を合わせると、それが売り上げ額だと直ぐに察した。

「うーん。ここがなーよくわからないんだー」  
アマンダは言いながら、さりげなく距離を詰めてきた。自分の太ももになにか熱いものがくっついてるが感触がした。彼女の説明を聞きながらチラッと覗くと、その正体は彼女の太ももだった。とても熱く、人の体温はこんなにも熱いのかと感がさせられる。しかし、それは心地いい熱さでもあった。

「あ、そこは、こうやって」  
俺はマウスを操作しながら答えて、アマンダを見る。真剣な表情で頷いていた。だが徐々に、そして確実に、彼女の体は俺に更にくっつき、空いた手で俺の体をいやらしくさする。まるで、彼女の頭と体は別人のようだ。

またか。俺は心の中で嘆息をこぼした。実はこの様な彼女に教えながらのセクハラ行為は今回が初めてじゃない。初めは肩が触れ合



う程度だったが、俺が何も言わないのを見て徐々に大胆になっていき、現在ではこの調子である。

「ふーん。そこを操作するんだ」

白々しいく彼女は言う。

……うん。決めた。別にどのタイミングでも良かった。前回でも良かったし、次回でも良かった。それがたまたま今回だった。それだけだ。

「ボス」

俺は、俺に触ってくるアマンダの手を掴んだ。すると、アマンダの体は面白いぐらいに跳ねた。平然としていた表情は徐々に恐怖に歪んでいく。

「な、なんだ？ ジョージ？」

アマンダは声を震わせて言った。彼女のまるで親につまみ食いがバレたような表情は感想としては可愛いかった。

「ボス。いや、アマンダ。今日の集会後に時間はありますか？」

俺は彼女の手を掴む手を恋人つなぎに変えて、彼女の耳元で囁いた。

客観的に見ればフツメンが美女を誘惑する様子は、自分で言ってる気持ち悪いし、恥ずかしいかった。しかし、ここは貞操観念逆転の世界。ある程度イケメンじゃなくても行ける。はずだ。覚悟に十なん週間かかったが、やっと言えた。

こちらをセクハラしといて、拒絶されたら正直死ぬる。

昔のトラウマで、体を使った売りを死ぬほどしたくないからギャングに入ったのに、しかし今はアマンダを誘惑している。……まったく。

「ジ、ジョージ」

アマンダは驚いた表情で見てる。が、俺の言葉の意味を理解したのか、頬を染めて頷いた。

さっきまでセクハラオヤジだったが、面白いもんだ。今では恋する少女である。

アマンダは唇を突き出して、キスをしようとして来た。俺はすぐさ

まそれを止める。

「ただ、ただ少しだけお願いがあります」

「? なんだ?」

「フェアリファミリーとの次の取引に、俺も連れて行ってください」  
フェアリファミリーとは、ユダヤ系マフィアで、俺たちエンジェル  
サグの麻薬の供給元である。一般的にボスであるアマンダと彼女が  
本当に信頼する数えられる人しかフェアリファミリーの住所を知ら  
ない。

「ーダメだ。他のにしてくれ」

アマンダはさつきまで可愛いらしい表情はどこへやら、真面目な表  
情でそう言った。

やはり……断られるか。それもそうか、今まで何をやっても口を閉  
じていた小動物が、急に野心? き出しにして来たんだ。それもセクハ  
ラしかしていない間柄、当然だろう。

だが、もしフェアリファミリーのボスに会い、気に入られば、俺の  
将来的役に立つはずだ。何が何でも会いたい。

「アマンダ。お願いです。」

「無理だ」

アマンダはノートパソコンを傍において、俺から離れ立ち上がった。  
彼女の声がどんどん冷たくなっていく。

「……………もし連れってくれたら、今後俺はボスに絶対的の忠誠を  
誓います」

彼女を見上げて、俺は言った。

「お前たちがギャングのボスである私に、忠誠を誓うのは当然だ。  
交渉材料にはならない」

「あ、ああ。そうです。でも俺たちにはイタリアやシチリアマフィ  
アのような血の掟はない。ここはストリートギャングであって、組織的  
なマフィアではない。絶対的な、忠誠は誓っていません」

「うん、ま、そうだな」

「だから、俺は君に絶対的の忠誠を誓う。君の望みは何でも聞く」

「ふーん。絶対的の忠誠ね……」

「ああ、犬になればと命令されれば、俺はなります。三回回ってワンと鳴けと命令されれば、俺は馬鹿みたいにします」

「犬ねー……………」

それ以上アマンダの言葉は出てこなかった。彼女の表情はここからでは窺い知れない。

「フアエリフアミリーとの取引に付いて行きたい訳は？」

再びアマンダが口を開くと、彼女の声から抑揚がなかった。

「成り上がりたいから」

俺は咄嗟に嘘を言おうとしたが、さつきまで絶対的の忠誠を誓うとのたまったのに、その後見え透いた？をついたら意味がない。なので、正直に答えた。

「男のくせに、野心？き出しだな」

「はい。じゃなきや。今頃男娼になってます」

「ふーん。猫だと思ってちよっかい出してみれば、なかなかのトラだったか」

「……」

「……(ふむ。絶対的の忠誠とやらは、信用できないが、野心あるトラをまるで子猫の様に飼いならすのも面白いかもしれないな、もしいずれ垂簾聴政となるか地位を奪われたとしても、私にはそのぐらい能力しかない話か。それに……こいつの体を味見しないのは惜しいな)」

「……」

アマンダの無言が続いていく。今から考えて見ればやはり時期尚早だったのだ。あと何回か体を合わせてから切り出すべきだった。それを、俺は。焦って……。タイムマシンがあつたらやり直したい。

「分かった。良いよ」

「…………え？」

今、アマンダはなんと言った？

「だから、良いと言ったんだ」

「ほ、本当か？」

「ああ」

「あ、ありがとう！」

「それより、私に絶対的の忠誠を誓うんだらう？　犬になれと言われればなると」

「ああ、そうだが？」

「じゃあ、そうだなとりあえず、」

「え？」

アマンダは振り向き、そして俺をソファから引きずり落とし、自分はそのソファに腰を掛けて足を組み冷たい声でそう言った。

「え？　じゃない。とりあえず犬になってみる。四つん這いになって、返事はワンだ」

「い、いや、あ、あれは例えで、」

「返事はワンだ」

「今「ワンだ」

アマンダに言葉を塞がれ俺にはどうすることも出来なかった。

「……ワン」

俺は四つん這いになって、そう鳴いた。下を見れば地面が、正面を見ればアマンダのすらっとした足が見る。窓から差し込む光が彼女の肌に反射し艶やかだった。外ではビートと共にフリースタイルラップが俺にこれが、今この瞬間に起こっている事は現実だと知らせてくる。

「お手」

と、アマンダは手のひらを俺に差し出して来た。

俺は、迷った末自分の握った拳を彼女の手のひらに乗せる。

「はははは、今のこの状態。もしデミに見られたら彼女はと言うのだからうな」

「……彼女には「ったく。返事はワンと言ったろ」

「ワン」

「可愛い、よしよしよしっ」

アマンダは笑顔で俺の頭をなでて来た。屈辱感となぜか喜びが合わさり、俺は妙な気持ちになった。

「じゃあ、次はそうだな……」  
その後俺はアマンダに命令されて、色々な犬の真似をさせられた。

2

「ははは、あー遊んだ。遊んだ。あー面白かった。もう良いよ  
ジョージ。普通に喋っても」

「……はい」

もうどのぐらい時間が流れたのだろう。もしかして無限に感じていた時間は本当は10分も経って居ないのかもしれない。

今はやっと終わった安心感しかない。屈辱感よりもいつ誰が入ってくるか分からない緊張感との闘いもこれでようやく終わりだ。

「さて、おふざけもこのぐらいにしてと、お前の覚悟は十分に理解したぞ。ジョージ」

「……なんだ？」

久しぶりの人語に、言語が通じる素晴らしいに、俺は心の中で感極まった。

「今日の集会後に、ヤクを補充しに行くから。集会後私の所に来い」  
それは、つまり今日中にフェアリアファミリーに行けると言う事だった。

「はい！ ありがとうございます！ ボス」

「変わらずアマンダが良い。じゃあ、お前はソフィアたちが待つている部屋に行つて、集会が始まるのを待ってろ。さつきも言ったが私は全員が揃ったら行く」

「ん……ノートパソコンについては？」

「あ？ ああ。うん。自分で何とするから気にするな」

やはり、今の今まで俺をセクハラしようとする言い訳だったのか、思えば、可笑しいものだ。26歳の若者がノートパソコンの使い方を知らないなんて。

「はい。分かりました」

だが、俺はそれ以上余計な事は言わず、ソフィアたちがいる部屋に

向かった。

2階に上がり、廊下を進み続け俺はある大部屋の扉を開けると、その中にはソフィアを含むセットのリーダーたち延べ13人がいて、一斉に俺の方に向いた。どうやら俺が最後らしい。アマンダめ、全員が揃ったら行くつて、俺が最後なのかよ。

俺は彼女らと挨拶を済まし席に着き、ソフィアや彼女らとたわいもない談笑を始めた。

それから待つこと5分。アマンダが入ってきて事で定例集会が始まった。

議題はこの2週間の売り上げ額や勢力拡大についてどうするべきか等々だった。普段と変わらずいつも通りに報告していく。そして、議題が最近何か変わった事はなかったというところで、

「しかし、最近勝手にヤクを売ってるやつも増えたよな」とそんな中誰かが言葉をこぼした。

「あー、確かに。この前私たちのシマなのに、勝手にヤクを売って、私たちの事を何も知らないやつに出会ってさ」

「あー・私も」「私も」「同じく」

それを聞いて、そう言えばと思い当たる節があった。数日前俺とデミもそんな感じの様なやつらに出会っていた。確か……

「ヒスパニック系だったけ」

「あ、同じだ」

「私も」

これは決まったな。恐らく……

「恐らく、ヒスパニック系ギャングの侵入だろう。市外か市内かはまだ分からないが、エンジェルサグスを知らないなかなか離れたところからだ。

とりあえず次にやつらに出会ったら拷問して、なぜわざわざこのゲロ以下の街に来たのか、聞いてこい。そして思い知らせてやろう。この街でヤクを売るには誰の許可が必要なのかを！」

「はい！ ボス！」

そうしてヒスパニック系ギャングであろう彼女らへの対処は決まり、次の議題に移り、いつも通りに戻り集会は終わった。

そして、みんながヤクを補充して続々と帰る中俺は、ソフィアに「ボスに用があるから先に帰ってくれ」と言っソフィアを先に帰らせた後、アマンダに話しかけた。

「アマンダ」

「ああ、分かっている。少し待て」

それ以上アマンダは何も言わず、残ったヤクの分配の仕事を他の者にやらせ、俺はアマンダの車に乗った。

車上ではラジオも音楽はなく、彼女も無言だった。

ただ車が常時便秘の様な110号線州間高速道路に乗ると、アマンダの口は閉じる事なく渋滞を罵り続けて、正直退屈な車内では良いエンタメになった。

語彙の多さや多種多様なファツキンの使い方を感心しながら聞いているうちに、いつの間にかクラウン市に着いた。そこを更に走らせて、市中から郊外へ。

すると、傍に監視カメラがあるゲートが見えてきた。車両ナンバー認証システムがあるのか、ブザーを鳴らさずともゲートは自動的に開いた。そして、大きな別荘が見えて、ドア前に着くとアマンダは車を止めた。

「良いか？ お前は私が良いと言うまで口を開くな。よそ見をするな。勝手どっかに行くな。トイレに行きたくなったら私に言え」

「ガキかつ。俺は」

「驚いた。15歳はガキじゃなかったのか」

「……」

「返事は？」

「……分かった」

「ワンじゃないのか」

「こいつ……」

いやでも、その15歳のガキにお前はセクハラ行為と犬の真似をさせたけどね。とつい出そうになった言葉を俺は強く我慢して飲み込

んだ。

「あと信用されたければ、銃はここに置いていけよ。それが彼女への礼儀だ」

「……ああ、分かった」

それから、別荘の中から黒い服を着た女性が向かいに来て、俺たちは中に案内された。玄関にはメズーザーが斜めに飾ってあった。

ドン！

突然銃声の中から聞こえた。それから更に何回も銃声が聞こえてくる。アマンダと案内をする女性を見ても平然の顔をしていた。どうやら、家の中で銃声が響くのは普通の事ようだ。……どんな、普通だよ。

ファエリファミリーのボスは、想像以上にまともじゃなかったようだ。

彼女たちに付いて行きプールがある開けた所に着くと、

「あつー！ おっしい！ もう一回っ！ もう一回っ！ 次は絶対にあてるから、動くなよー！ 絶対に動くなよっ！」

そこには、金髪のロングヘアと綺麗な緑色の目。そしてボンキュツボンでしか形容出来ないスタイルを持った30代前半であろう妖艶な女性がいた。

彼女はまるでおもちゃで遊んでいる子供の様な燦々とした表情で、銃を構えていた。その先には頭にりんごを乗せられて、涙目で体をぶるぶる振るわせて、口を塞がれてうめき声しかあげられない裸の若い女性。

ーなんだこれは。なんだこの映画のワンシーンでしか見たことがないイカレた状況は……。

「彼女が、ファエリファミリーのボス。エドナ・ファエリだ」  
アマンダの紹介に俺は愕然とした。

……やはり、ギャングのボスなんてやっている様な奴にはまともな人は存在せず、どいつもこいつも頭のネジが何本か飛んでいるらしい。



## 第6話―F u c k i n g N u t s―

1

アママンダの紹介に俺は愕然とした。

「さあー、もう一発行くぞーん？　って、あれ？　アママンダじゃないか？」

「はい。お久しぶりです。マダムフェアリ」

「おう、おひさー。今日はなんのようだいー？」

言いながらエドナはアママンダの隣にいる俺に気づき、あ！　と何かに気づいた様子で、アママンダの返事を聞かずまた口を開いた。

「あー！　もしかしてソレを売りに来たのー？　あ、でも他の子は？　もしかして単品のみ？　えー単品だけかー。人身売買をやるなら出来ればまとめて売ってきて欲しいなー。でも良いや。私たちの仲だし、単品でも「うーんっ！　うーんっ！」

俺とアママンダの反応を気にせず、エドナは喜々と早口で喋っていた。が、途中で、的にされていた裸の女が突然、うめき声を上げて騒ぎ始めた。

「……単品でもある程度高くは「ううううーんっ！　ううううんっ！」

……ハアー。うるさいなー。お前。毒が効いてお前が死ぬまでまだ時間が残っているから、少しのおしやべりぐらい許してよ。ミリ」  
毒……？　てか、いつまで勝手に喋り続けるんだ。この人。それに、ソレってのは俺の事？　俺はアママンダを見た。彼女は笑顔でエドナの話に頷いていた。

「あ、どう言う事って思ったでしょ。えつとね？　こいつ。私の事を裏切ったから、いま私の遊び相手になって貰ってるんだあー。毒が全身に回って死ぬのが先か、私が彼女の頭の上に乗っているリングゴを打ち抜いて彼女が解毒剤を手に入れて解放されるのが先か、てね？　で、アママンダもどう？　やってみる？」

エドナはアママンダに自分の銃を差し出した。

「いえ、今日はビジネスが目的なので、今回は遠慮しときます」  
アマンドは笑って答えた。

「そう？　まあ、うん。そうだね」

エドナはアマンドの返事を聞いた後、納得の表情になり、手の銃を的になっていた裸の女性に向けた。そして、引き金を引いた。

ドン！

銃声の余韻も冷めぬうちに的の女性は崩れ落ちた。彼女から額から赤く細い噴水が噴出し、彼女の顔を染めた。血は地面をゆったりと流れ、プールに流れ込み、透明だった水も赤く染めていく。

それを見て案内役の女性と他のフアエリファミリーの組員は、何も言わず死体になった女性に近づき、彼女を片付き始めた。

「な、何を……っ」

俺は、唐突な彼女の銃撃に思わず驚きの声を上げる。アマンドは俺を睨み、エドナは俺に微笑んできたあと、アマンドに向けて話す。

「仕事なら仕方ないね。私も遊びの時間と仕事の時間を区別できる。分別のある大人だからね」

結構彼女の匙加減だったのだ。わざと銃弾を外し、あの女性が苦しむのを楽しむだけ楽しんで、遊び終わったら捨てた。ーイカレてる。

「それで、ソレの事なんだけど。若くて、顔も悪くないわね。うーん。そうね、約140万円1万ドルってのはどう？」

「マダムフアエリ」

「なに？　アマンド。先に言っておくとこれ以上は出せないわよ？」

「いえ、違います。紹介し遅れましたが、彼は私の部下です」

「……ふーん？　これ。売り物じゃないんだ……」

今まで軽い声だったエドナの声が一転して低くなり、眉間に皺をよせて怖い顔つきになった。

「ねえ……アマンド。私？　言っただけだったっけ？　初対面の人は信用できないって」

「ーはい。ですので、彼が信用に足るかいつものように試しても

構いません」

俺を、試すー？

「……本当に良いの？」

「はい」

アマンドはきつぱりと返事をした。

だから、試すって何の話だ。とは言え。このイカレユダヤ人が俺に何をしようとも、俺はこいつに気に入られる為に甘んじて受けるしかない。俺が上に登るために……。

「そうか。ねえ、ぼくう？」

エドナが笑顔で話しかけてきた。が、その目は、人を人とも思わない冷たい物だった。俺は視線をアマンドに向けた。彼女が頷いたのを見てから返事をした。

「はい。何でしようか？ マダムフェアリ」

俺はアマンドを真似て、彼女をそう呼んだ。

「あそこに立ってくれる？」

そう言つてエドナが指さしたのは、あの的だった女性が射殺された場所だった。もう既にこの短時間でフェアリアミリーの組員がある程度片付けたので、死体はなかったが、まだタイルに溝にシミが残っており、プールに染み込んだ赤い水もまだあった。

「ま、まさか……？」

「そう。でも、流石にあなたアマンドの部下だから、殺しはしないわよ。ジボラ！ 防弾チョッキいつものを持って来て！ ほら、これで安心ね？」

エドナがそう命令すると、ジボラと呼ばれた俺たちをここに案内した女性は、彼女の命令に頷いて別荘の中に入った。

「さあ、さっさとそこに立ってくれる？」

「……はい」

拒否する選択肢などなく、俺は歩き出し、彼女が示した場所に立った。

しばらくして、ジボラは防弾チョッキとなぜかうオツカと銘柄された酒を持ってきた。

ああ、アルコールを飲ませて俺の痛みを和らげるためか。少しは優しい所もあるのだな。このイカレは。

と思つたらジボラは防弾チョッキだけを俺に渡してきた。

「ーあの、酒は？」

思わず聞かすには居られなかった。

「あ、これ？　これは私用よ。だってほら、私ってエイムが良いでしょう？　弾が自分が思い通りに当たったら面白くないじゃない？」  
そう言つて彼女は、ショットグラスに注いだウオツカをそのままストレートに飲み干して、また注ぎ込み、まるで水の様にかぶがぶと飲み始めた。スラヴ人かよ。いや、ユダヤ人か。

「……はい。そうですね」

……前言撤回だ。

俺は引きつった笑顔を彼女に向かけた。キチガイが。

「うん。でしょ？　でしょ？　で、あなたに選んで欲しいの」

飲みながら彼女は、話を続ける。

「？　何をでしょうか？」

「そのまま防弾チョッキを着て撃たれるか、防弾チョッキを着ずに撃たれるか。あ、もちろん。後者を選べば、口径は小さい弾にするわよ。どっちにする？」

ーはあ？

エドナはほら、私優しいでしょう？　と微笑んだ。彼女のウオツカのボトルの隣には、さつき女性を撃ち殺したZion Republicのジェリコ941が置いてあった。恐らく俺が前者を選べば、あれに撃たれるのだろう。

俺はアマンダを見た。彼女はまるで『これはお前が望んだ事だ。どうなつても私は知らん』と言わんばかりの視線をこちらに向けていた。

「では、」

俺は一呼吸を置いた。心の中でまだ迷つてるからだ。俺は必死になつて考える。

例え防弾チョッキがあつたとしても、手足と頭は守ってなく、死ぬ

ときは死ぬし、なかったとしても、口径が小さい弾でも当たり所が悪ければ死ぬときは死ぬ。とは言え、普通に考えたら防弾チョッキを着用するを選ぶだろう……。

「俺は、」

いや、いや、何を考えてんだ。俺は。何を生きようとしてんだ。俺はこの世界で成り上がりと決めたんだ。ならば、死すら覚悟のはずだ。そうだ。俺はギャングスタだ。ギャングスタは死を恐れない。

それに、これは2度目の人生。死んだら死んだでラツキータイムの終わりだと思えばいい。

俺は、防弾チョッキを脱いだ。

「このままでお願ひします」

「あら、そう？ ジボラ。口径が小さい銃をー」

「いえ、銃も、このままで、お願ひします」

気に入られるために、このイカレよりもっとイカレた事をしないと。

俺の言った事が一瞬理解できなかったのか、エドナはきよとん顔になった。が、直ぐに笑い出した。

「はははははっ！ えー!? 笑い死にそうなんだけどっ！ くっくっくっふふふふ本当に良いの!？」

エドナは目尻に溜まった涙を拭き、にまにまして聞いて来た。

「はい」

「おい！ 何を考えてるんだ！」

俺の返事に、さっきまで我関せずのアマンダが、緊張感を含んだ怒りの声を出した。

「くっくっくっくっふふふ。アマンダ。止めてやるな。彼が決めた事ですよ」

「だけど、マダムラファエリ！」

「アマンダ。これは、彼が決めた事ですよ？」

エドナは棘のある声で言った。

「申し訳、ございません……」

「うんうんうんうん。これは、彼が決めた事なので、どうなろうと彼

も覚悟の上ですよ。そうですね？」

「はい。そうですね」

俺の即答に、エドナはまた噴出した。

「ははは良いわ！ 良いわね！ あなた！」

「ありがとうございます。マダムラファエリ」

「うん？ そう言えばあなた！ 名前は何て言うの？」

「ジョージ。ジョージ・ミナトです」

「ジョージ・ミナトねえ！……うん。それじゃあ、ジョージ。撃つわね」

エドナはショットグラスに入ったウオツカをかきこみ、銃を俺に向けて構えだした。俺は目で銃口に見つめて、銃弾の到来を待つ。

「あ、一応死ぬかもしれないし、何か遺言見たいのはある？」

「……そうですね。デミと言う女性に、先に逝って待ってる伝えてください」

「デミってのは、ジョージ君の女？」

「……いえ、家族です」

「ふーん。そ？ 分かったわ。じゃ、改まって、撃つわよ？」

「はい」

「イーニーミーニーマニーモーどーこに、しーようかーな……」

「……ああ、やっぱり、怖い。怖すぎる。2度目と言えー死にたくねえな……」

ドンっ！

「がっあー！」

薄れていく視界の先には、エドナの燦爛とした笑顔があった。

このイカレたカイクK i k eがっー

銃声と共にきた衝撃で、俺の体はプールに転び落ち、その赤い水により色濃くしていった。

2

「ん……あ あああ」

痛みで目が覚めると、豪華に装飾された部屋のベッドに自分がいた。

「目が覚めましたか、ジョージさま」

自分の名前を呼ぶ声に目を向けると、ジボラが俺を見つめていた。

「くっつああ」

俺は身を起こして、自分の体を見る。なぜか新しい服の下に左肩回りを重点に包帯が巻かれていた。あ、そうか。俺プールに落ちたのだった。そして、俺のM9はーああそうだ。アマンダの車の中に置いてあったな。

「銃弾はジョージさまの左肩を貫通し、幸いにも神経を傷つけませんでした。良かったですね。例え酔ったとしても、相変わらず神かかったママのエイムに感謝してくださいね」

「ああ」

酔いながら、本当にあのイカレがわざと狙ったとでも言うのか？

「それより、ジョージさま」

「ん？ なんだ？」

「あなた……中々のイカレですね」

ジボラは言いにくそうに言った。

「はあ!?! なんだ!?!」

「だって、私。初めて見ましたもん。あそこで防弾チョッキを着ないを選ぶ人。更に口径が小さい銃にしないなんて」

「……今さつき君が言ったじゃないか、マダムラファエリのエイムは神かがっているって、だったらどっちを選択しても意味ないじゃないか。彼女の思った通りしか弾が当たらないのだから」

「はい。ですが、私が教えるまではジョージさまは知りませんでした。だから……ママも言っていましたよ。あんなイカレ久しぶりに見たって喜んでましたよ」

「だから……イカレって」

あいつにだけは言われたくないよ。とは言え、あいつに気に入ったの……か？ なら撃たれたかいはあったものだ。

て、あれ？ 今ジボラがああのイカレエドナの事をママって言ってな

かった？

「あれ？ 今、マダムラファエリの事をママって呼んでなかった？」

「はい。マダムラファエリは私の実の母ですが、なにか？」

そこで俺は初めてジボラを正視した。正直今までは緊張のあまり、他の人が目に入らなかつたが、確かに彼女はあのイカレの、エドナと同じ髪型の金髪と緑目、そして美貌と体型を受けついていた。

あんな女が結婚できて、子供までもいるとはな。衝撃的だ。

「いえ、確かに言われてみればそうだな。えっと失礼だが、ジボラは今年で何歳だ？」

「今年で14歳よ。今ママは32歳だから、18ぐらいの年に私を産んだのね」

彼女、ジボラは、彼女の母と違い冷静にそう言った。

18歳のときか、貧民街ではもつと早い人もいるし驚きはしない。それより、むしろ、

「え!? 俺より身長も高いし成熟してたから、てつきりもつと年上だと思ってた」

こんな成熟した体付きで、今の俺より年下かよつ。ファエリファミリーのボスの娘なら、ワンチャン籠絡しようと思つたが、14のガキかよ。ならやめよう。犯罪だし。いや、俺犯罪者だけど。

「いえ、大丈夫。よくある反応ですので、もう慣れました」

「そうか……なんて言うか。母より大人びてますね」

「ありがとうございます。それもよく言われます」

反面教師と言うやつなのだろうな。あのイカレを幼いころから見てたからこんな落ち着いた感情の起伏が低い、成熟した性格になつたのだな……。

あ、そう言えば。

「そう言えば、うちのボスとマダムラファエリは？」

「はい。彼女らなら今応接室で、取引をしています」

「そうか、だったら連れて行ってくれないか？」

ジボラは少し驚いた表情になった。

「え？ でもまだ安静にした方が？」



「んや、こんな傷、痛くも痒くもないね」

正直に言くと、凄く痛い。子供の前でカッコつけたかったので、俺は我慢してそう言った。

「そう、ですか。分かり、ました」

ジボラは頭を伏せて、ぷろぷると体を震わせた。

「では、付いてきてください」

続いて、そう言いながら彼女は歩き出した。時折なぜか振り返り無表情で俺を見つめる彼女に、俺は疑問を持ちながらも付いて行った。

応接室に着くとテーブルの上には、何個もあるパックに入った白い粉と20丁はあるUZI銃が置いてあった。

だが、アマンダとエドナの姿は椅子に座って居らず、彼女らの姿は、なぜか裸の姿で並んでいる沢山の10代の男の子たちの傍にあった。

## 第7話―Mean While―

1

ジョージが気を失っていた頃。アマンダとエドナは取引の為に場所を移し、今は応接室にいた。エドナは自分の部下を扉の外へと下がらせて、応接室には、大天使が悪魔を踏みつけて今まさに最後の一撃を加えんとする荘厳な油絵と一目で高価と分かるソファ椅子、テーブル。そして、ユダヤ教の象徴である燭台、メノーラーがあった。

アマンダはエドナが先にソファ椅子に腰掛けたのを確認した後、自分もテーブルを挟んだ対面するソファ椅子に座った。そして、エドナがタバコを取り出したの見て、アマンダはすかさず近づきライターでタバコに火を付けた。エドナは当然の様に受け入れ、一口吸って言った。

「しっかし、アマンダ。お前、いつの間にか面白い物を手に入れたわね」

「はい。マダムファエリ。私もついさっきまで知りませんでした」

「うん。私。あの子の事気に入ったわ。度胸もあるし。どう、私に譲ってくれないかしら？」

エドナは両手を合わせて、甘え子のような表情で言った。30代に思えないその可愛いらしさは、同じ女性でも直ぐに「はい」と答えてしまうぐらい魅力的だった。だが、初対面ならともかく、エドナの本性を知るアマンダは、顔を引きずった。

「いえ、いくら、マダムファエリの頼みでも……それは……」

「ふーん。まあ、そうか。私が気に入るぐらいだし、アマンダもあの子の事気に入るよね……」

エドナは少し納得の表情になった後、眉をひそて悩み始めた。そして、アマンダを見つめて、値踏みをする表情になる。

「ねえ、アマンダのギャング、エンジェルサグスだっけ？ それって何人だったけ？ 私、うっかり忘れたわ」

「お恥ずかしながら50人程度の小さいギャングですけど。それがなにか？」

「いえ、何でもないわー。50人ぐらいね……」

ヤバい!! 言葉こそ温和な物の、その隠し切れない氷のような冷たい目は、瞬時にアマンダに危険信号を発した。これまでの付き合いを考えて、エドナは手に入れたいと決めた物は余程の事ではなければ、どんな手段を使っても手に入れる。

きっと、今エドナの心の中で、彼女のジョージを手に入れたい欲とアマンダから手に入る利益を比較している。それで、もし天秤が彼女のジョージを欲する欲に傾けば……。その結果を想像しただけで、アマンダは身震いをした。

「え、えつと。さっきの話なんですけど。差し上げる事は出来ませんが、マダムファエリにお貸しする事でしたら出来ますが、いかかでしょう……?」

アマンダは言いながらエドナの表情の変化を観察する。もし、これで駄目なら……。仕方ないけど……。ジョージを……。

「……良いわよ」

「ほ、本当ですか? よ、良かった……」

エドナの了承と、少し柔らかくなった表情を見て、アマンダは、背もたれにもたれ掛かって、安心の息を吐いた。

クソ、ジョージめ。なんで、こんな事で私のギャングが危機に陥るんだよ。

アマンダは、心の中でジョージに罵声を浴びせた。

「それで、幾らかしら?」

「へ?」

「貸してくれるんでしょう? 無料な訳ないわよね、いくら?」

「いえ、いえ。とんでもありません! 日頃からマダムファエリにお世話になってるので、当然無料ですよ。必要な時に何時でも彼をお呼びください」

笑顔でそう言いながら、アマンダは「これ以上、必要ない事でお前みたいなイカレたカイクの逆鱗に触れたくねえんだよ。分かれ!」と、考えていた。

「そう? でも流石に無料で貸してくれるのは悪いわ……」

「で、では、マダムファエリがお値段を決めてください」

「あら？ 良いのかしら？」

「はい」

「そうね……じゃあ、1時間5000<sup>7</sup>000<sup>0</sup>ドル<sup>円</sup>ってのは、どう？」

「5、5千ドル!？」

どんな高級な男娼でもこれほどの値段はなく、エドナの口から出た想像以上の数字にアマンドは愕然とした。

「ん？ なに、まさか？ 足りないの？ カイクの守銭奴な私でも、結構出したつもりなはずよ？」

「いえいえいえいえ！ 違います！」

微笑みながら言ったエドナの自虐的な冗談に、アマンドは頭を強く左右に振った。

「そう？ じゃあ、このぐらいの値段で良いわね」

「はい！ ありがとうございます！ ジョージが必要な時は何時でも私にお電話ください！」

「ふーん……分かったわ。それで、そろそろ本題に入るけど、今日は何が必要で来たのかしら？ まさか、あの子を私に紹介したかっただけで、わざわざ来た訳ではないでしょうね？」

エドナの目に怒りが薄らと浮かんだ。

そうだった。予想外の収入を得たが、そもそも今日はジョージなどではなく、もつと重要な事で来たのだった。アマンドはジョージの時に給に衝撃を受けた頭を立て直して、急ぎ否定した。

「いえいえ、そんな事で、私がマダムファエリの貴重な時間を潰す訳ないじゃないですか」

「そう、なら良かったわ」

「はい。それで、今日来たのは、コカインを、そうですね……4パック。それと足が付かない、新品のサブマシンガン<sup>を</sup>20丁ほど頂きたいのです」

「ヤクはいつも通りで分かるが、足が付かない上新品のサブマシンガン？ それも20丁も？ なんだいアマンド？ 戦争でも始める気なの？」

「いや、実はですね。最近うちのシマに、見慣れないヒスパニック系のやからが、良く遊びに来ているんですよ。それで、何とか正体を突き止めた上お帰り頂けないかと、まあ、自己防衛ですよ。ただの」

「あら、そうなのね。アマンダ。何か必要な事があったら何時でも言つてね、出来る限り協力するわ」

私がお前の為に利益を生み出す限りだろう？ アマンダは、エドナの言葉に作り笑顔で答えた。

正直。可能ならばすぐにでも、エドナの協力を仰ぎ、やつらがどこ誰なのか知りたかったが、アマンダはエドナの本性を再度思い出した。1度借りでも作ったら、1度でも弱みを見せたら……最後の1滴まで利益を絞られる。アマンダは今までエドナの餌食となった人の姿が脳裏に浮かび、出かかった助けを求める声を飲み込んだ。

「ありがとうございます。マダムフェアリ。もしその時が来たら、是非ともお願いします」

そんな時は一生来ないと願いたいがな。

「うん。任せて頂戴。さてと、ガブリエラ？」

エドナはそう扉の外にも聞こえる様に呼ぶと、扉が開き、外で待機していた部下が入って来た。さつきくる時は気付かなかったが、ガブリエラと呼ばれた女性は20代で黒髪の綺麗な顔をしたスラヴ系で、彼女は少し東欧訛りのある英語で返事した。

「はい。何でしょうか。マダムフェアリ」

「包装されたコカイン4kgとUZI銃20丁をここに」

「はい」

「あつ、それとワインもお願い」

「承知致しました」

エドナは下がる部下を目で送り、待っている間、エドナとアマンダは他愛もない日常会話をして暇を潰していった。10分ぐらいすると、扉からノックの音が聞こえる。

「入って良いわ」

エドナの言葉を聞き、さつきガブリエラと呼ばれた女性は扉を開けて入って来た。

彼女はトーションを腕に掛け、手にRoman・eiconitiと銘柄されたワインと2つのワイングラスを乗せたトレイがあり、その後ろには、一人一人がケースを持った人が5人いた。

「失礼いたします」

エドナの領きを見て、ガブリエラはエドナとアマンダのそれぞれの傍にワイングラスを置き、ワインを注いだ。そして彼女らに指示し、ジュラルミンケースを地面に置いて、中のブツをテーブルの上へと置かせる。

全てのブツを取り出すと、ガブリエラは彼女らに、持って来たジュラルミンケースと共に下がるよう命令し、そして言った。

「コカイン4kgとUZI銃20丁でございます」

「うん。ご苦労様。じゃあ、どう？ アマンダ。ブツ確かめる？」

ガブリエラを傍に待機させて、エドナはワインを味わいながらアマンダに聞いた。

「いえいえ！ 私たち、何度取引したと思っっているんですか？ 今更マダムファエリを疑う訳ないじゃないですか？」

「そう？ ありがとう。んじや、取引成立ね？」

エドナの差し出す手をアマンダは握り、二人は取引成立の握手を交わす。

「はい。ですね」

「ガブリエラ、幾ら？」

エドナはガブリエラに聞いた。

「合わせて10万<sup>1千4百万円</sup>ドルになります」

ガブリエラの言った値段をアマンダは領いて、スマホを取り出した。

すると、突然少し喉が渇き始めたので、アマンダは傍のワイングラスを手に取り、中のワインを一口で飲み干して、いつものビールの方が美味しいなどと考えながら、スマホの暗証番号を入れ、ダークウェブからダウンロードした仮想通貨アプリをタップする。

アマンダがスマホを操作している所を見ながら、エドナはしみじみと言った。

「しかし、良い世の中になったわね。昔はみんな映画みたいにジュラルミンケース片手に現金で取引だったんだから」

「へー、そうなんですね」

金額を入力しながら、確かにわざわざ大金を持ち運ばなくなるのは、バイヤーとしては一つリスクが減って良いことだな、とアマンダは相槌を打った。

「あ、送金しました」

「はい。確認しますー確認致しました」

ガブリエラは自分のスマホを見ながら、そう言った。二人の会話を見て、エドナはうん、うんと満面の笑みを浮かべて、ワイングラスを持ち上げた。

「順調で楽しい取引を祝って、レ・ハイム<sup>乾杯</sup>！」

「レ・ハイム」

アマンダはガブリエラから注がれたワインを飲んだ。うん。やっぱり、いつものビールの方が美味い。エドナは自分の取引口座に大金が入ったのがよっぽど嬉しいようで、ニヤニヤが止まらなかった。

取引も終わったしそろそろ帰るか、ジョージはもう目が覚めたのだろうか……。あの野郎、勝手な事しやがって。帰ったら絶対にお仕置きしてやる。舐めやがって、オスガキが。

アマンダは口を開き、そろそろ帰りの意を切り出そうとした、その時。扉から再びノックの音が聞こえた。  
Speak Of The Devil。ジョージか？

「入って頂戴」

だが、入って来たのは、エドナの部下の一人であろう女性だった。ガブリエラと瓜二つな顔をしている。

「あら、ミカエラか、どうしたの？」

ミカエラは目で部屋を見回し、ガブリエラを見つけると、一瞬眉をひそめたが、直ぐに切り替えエドナに要件を伝えた。

確定した。ガブリエラと瓜二つの顔、名前からして彼女はガブリエラの姉妹に違いない。だが、どうやら彼女らの姉妹間は仲が悪いようだ。

「あ、お取込み中失礼しますっす。実は件の最終選別を終えましたっす」

件の最終選別？ なんの話だ？ アマンダはエドナを見た。すると、彼女の顔はより喜びに満ちた表情になっていた。

「お？ そう？ そうなのね？ じゃあ、早速連れてきて頂戴」

「マダムファエリ？」

アマンダは困惑な表情で、エドナに話しかけて説明を求める。

「まあ、見てて頂戴。面白い物が見れるわよ」

「あ。実は事前にマダムファエリがそうおっしゃると思つて、事前

に連れて来てるっす」

そう言つてミカエラは、扉の外を見た。

「おい、てめえら、出てこい」

ミカエラはエドナに向けた態度を突如一転させて、ならず者のような口調でそう言つた。

そんな彼女の口が悪い命令に答えて、10歳ぐらいの白人の男の子がおどおどと、恐怖に歪んだ顔を覗かせて出てきた。その後をアジア人、白人、黒人と様々な人種が1人、2人、3人とどんどん出てくる。みな恐怖に歪んだ表情なのだが、それらはどれも可愛いらしく、彼らの将来の顔も容易に想像できる。彼らはゆつくりと恐る恐ると部屋に足を踏み入れた。しかし、そんな彼らの遅さに痺れを切らしたミカエラは、

「スリーカ」

You の Fuck ing Little dick おっせんだよ！ ファエリさまを待たせるな」

先頭の一人であつた白人の男の子の髪を乱雑に掴み、地面に投げ捨てた。地面に衝突して痛がる彼の背中をミカエラは強く踏みつける。男の子は背中から感じる痛みに悲鳴を上げて、泣き叫んだ。その光景を見た男の子たちは我先にと部屋に入るようになり、最終的には20人ほどになっていた。ガブリエラは一瞬だけ怒りの表情を見せ、アマンダは困惑しながらも、男の子たちの顔を見渡しながら「眼福眼福」と笑い、そして、エドナは何を考えているのか分からない笑みを浮かべ



たあと、

「こら、ミカエラ。止めなさい。その子が可哀想でしよう?」

と、ミカエラがしている行為を咎めた。

「あ、はい。すみませんっす。こいつらがちんたらして、フアエリさまを待たせていたので……」

「ガブリエラの隣に待機」

ミカエラは怒られた子犬の様にしゅんとなり、ガブリエラの隣へと向かった。ガブリエラはエドナが見えないところでミカエラの頭を叩き、ミカエラも負けず劣らずにガブリエラの足を強く踏んだ。

なにやっつてんだこいつら。アマンダは横目で呆れながら彼女らの小喧嘩を見ていると、

「大丈夫だった?」

エドナは立ち上がり、慈母の様な微笑みで、さっきまでミカエラに踏みつけられた男の子に歩み寄り、彼の体を起こして話しかけた。

「は、はい。だいじょげほげホッ! ゲホゲホッ!」

男の子は、さっきのミカエラの仕業で呼吸困難になっていたようで、咳をしながら返事をした。

「どうどう、可哀想に……安心して、あの子には後でしっかりと罰を与えるからね」

エドナは、男の子の背中を慈悲の表情でゆつくりとさすった。性別は逆で、宗教も違うけど、まるで聖父マリオが幼いイエス・キリストを抱きかかえるという、聖父子像である。と、その光景を見たアマンダを含むみんなはどこか考えた。が、アマンダはその様な考えを直ぐに打ち消した。しかし、エドナの本性を知らない虚像に騙されてる男の子たちは、さっきまでの恐怖は和らぎ、どこか安心した表情が浮かべた。

「その代わりなんだけど、お願い一つ聞いてくれない?」

エドナは目の前の男の子を含む彼らを見渡しながら聞いた。

「は……い」

未だその神聖な光景に恍惚した表情を浮かべている彼らは、なんも考慮せずにエドナのお願いを頷きで返事をした。この人はさっきの

悪逆非道な女とは違う、みんながそう思ってた。

「君たち、服を脱いでくれないかしら？」

だが、エドナのお願いの一言が彼らを現実には引きずり戻した。

## 第8話 | Life, sa Bitch #1 |

1

あのイカレ女の娘だと言う、ジボラが前を歩き、俺は彼女の後ろをついて行った。外を見れば、既に夕陽は空をオレンジ色に染めて、水平線の向こう側の空は暗く、夜の到来を知らせた。

時よりジボラは、無表情でこちらを何を考えているか分からない目で見てくるのは何故だろう。

「あ、あのなにか……っ？」

「いえ、何でもありません」

聞いてもはぐらかされたので、気にしない事にした。

暫くして応接室の前に着いたので、ジボラはノックをした。直ぐに中から返事が帰ってくる前にジボラはドアを開けた。中は………。

応接室のテーブルの上には、何個もあるパックに入った白い粉と20丁はあるUZI銃が置いてあった。

しかしアマンダとエドナの姿は椅子に座って居らず、彼女らの姿は、なぜか裸の姿で並んでいる沢山の10代の男の子たちの傍にあって。

なんだこの状況は……？

ただでさえ、撃たれた銃創も未だ痛いのに、俺の頭の頭痛も痛くなり始めていた。

……と冗談で二重表現しても、痛みは和らげる事はなくずしずしと襲ってくる。

ジボラもアマンダも無言でそのやり取りを見ていたので、当然俺も邪魔する事は出来ないため、エドナの用事が終わるのを待った。

「うくん。Eeny, Meeny, Miny, Moe。そう〜ね。このガキとこのガキ……うくん。あ、あとこのガキはVIP用に教育して、それ以外は路上で客取らせても良いし、傘下の娼家に売っても良いし、お前に一任するわ、ミカエラ」

エドナは、おやつを人差し指で選ぶ様軽い口調でそう言った。

「はい。承知したつす」

気付かなかつたが、その奥にいた姉妹であろう二人の一人が返事をした。ミカエラと呼ばれた女性はそう答えて子供たちに地面に落ちた服を着せさせ、彼らを連れて去ろうとした時、エドナは思い出した様に再び口を開いた。

「あー。そうだったわ。そうだったわ。ヒューマン・ブランディング。焼き印をするのも忘れないでね？ それとチップも埋め込んでおいて？ こいつら。しっかりと管理してあげないと、すぐ逃げようとするんだから」

まるで、そこにいるのが家畜であるかのような物言いだ。

瞬時。フランチェスカに出会う前の情景が脳裏を去来した。全身の至る所にあつたもう消えたはずのあざが疼き……つ無意識に俺の拳に力が入った。

「りょっー！」

ミカエラはエドナに敬礼して、快活に笑い、牧羊犬の様に彼らを大きな声で部屋から追い出した。そして、彼女が去っていく前に俺を見下した目で見ていたのは、気のせいではないだろう。

俺はあいつらとは違う。俺はあいつらとは違うつ。俺はあいつらとは違うつ！ 俺は奪われる者から奪う者、強者になったんだ。だから、だから……だから。

彼らの去り際を見ながら、心の中でそう言い続けて、呼吸を落ち着かせる。

「ママ、ジョージさんを連れてまいりました」

ジボラが母の用事がひと段落したのを見て、話しかけた。

「ママ……っ？」

エドナはジボラを睨んだ。

「あ、いえ。はい。申し訳ございません。マダムフェアリ」

「うむ。それで……」

エドナは俺の方を見た後、近づいて来て、俺の腰に手を回しきた。香水の匂いが、刺すように鼻孔を衝く。

「おっジョージ、傷の具合はどうなのかしら？」

エドナは柳眉をひそめ、心配そうな声で言ってきた。

「まだ痛みますね」

どうもこうも正直さっきの事で、痛みは更に倍増したのだが。

「そうなのね、お前の度胸を試す真似をして済まないね。私は初見の者を信用出来ないたちなのよ。許してくれさるかしら?」

言いながら、彼女は手を腰から次第に尻に移した。撫でまわすその手の動きといやらしい目で、彼女が何を考えているのか一目瞭然である。

「はい。自分も死を覚悟の上で受けましたので……」

とは言え、未だにまさか本当に撃つてくるとは思わなかったが……。ああ言うのって脅すだけ脅して、結局撃たないのが、映画ではセオリーじゃないのか?」

「ふ、うふふん。良いわ。やっぱり、良いわね。私。お前の事気に入ったわ」

でもよし!・これでマファイアとのコネクションが出来たつ!

「そうですね、ありがとうございます」

俺は高まる気持ちを心の中に抑えて、冷静に言った。それはそうと、相変わらず、エドナは俺の尻を撫でまして来る。

アマンダを横目に見る。彼女は窓の外に顔を向け、うすづく太陽を見ていた。どういう感情なのか、ここからでは窺い知れない。

「ねえ、ジョージ。この後時間はあるかしら?」

エドナの熱い吐息が鼓膜をうち、耳に囁いて聞いてきた。それでも、この安静な応接室には十分な音量だったようで、その奥にいた女性もジボラとアマンダの耳が一瞬ビクツとなる。

「さて、どうなんでしよう?」

言いながら、俺は困った風にアマンダを見た。エドナも俺の視線を追ってアマンダを見る。

「アマンダ。どうなの?」

「あ、えっと。取引も終わったので大丈夫だと思います」

「だそうよ?」

それですか。不干涉ですか。エドナのセクハラもこれから起きる

であろうその先の展開も黙認ですか。

なら……。

「……はい。なら大丈夫です」

俺がそう言うのと、にやにやとエドナは笑い。アマムダなど他の女性は一斉に、俺を足のつま先から頭のとっぺんまで舐めるように見ている。

元々そう言う事をするのは慣れていたし、覚悟もしていたのだが、ただ殴らないと、首を絞めないと、興奮しない特殊性癖はトラウマを呼び覚ますので、出来る限りやめて欲しい。

とは言え、こんなイカレ女は、きつとそう言う特殊性癖しかないのだろ。

なので、成り上がるためだ。俺は血反吐を吐いて我慢するしかない。

「そう、なら行きま……」

前世で言うセクハラオヤジの様な笑みで、そう言ってくるエドナの言葉は、突然の電話の着信音によって邪魔された。

エドナは表情を一転させて、厳しい顔でその出所を睨んだ。アマムダは、その出所が自分からであると気づくと、申し訳そうにスマホを手に取り、エドナに電話に出る許可を求めた。

エドナの少し遅れた冷たい表情での頷きを見たあと、アマムダは、スマホを耳に当てた。

「ねえ？ ジョージ。私の物にならない？」

電話に集中しているアマムダに聞こえないように、エドナは再び俺の耳に熱い吐息を吐いて、聞いてくる。

こそばゆい感覚を我慢しながら、俺がどう返事すれば良いのか、困っていると……。

「はっ!? なんだったってー!」

アマムダから大きな声が上がった。こわばった声で、緊張している様に聞こえる。俺たちは一斉に疑問な表情で彼女を見た。

「ああ、で、状況は!?!」

「そうか……そうか……ああ、分かった。今向かう!」

「クツソ！ ファック！ ファック！ ファック!!! ファックン  
ファック！ ファックンマザーファックンファックンファッ  
クつつつ!!!」

アマンドはそれで電話を切り重苦しい表情で、俺を一瞥して、エド  
ナに向かって言った。

「申し訳ございません。マダムフェアリ。急に声を荒げてしまって  
……実はシマが襲われ占拠されました。」

「あゝらゝ、あゝらゝ。それは大変ね。でもまた取り返せばいい  
じゃない？ 丁度ここにも新しい武器があるじゃない？」

他人事のようにエドナは言う。実際に他人事なのだろうけど。

「はい。そうなのですが……」

アマンドはまた俺を見て、一呼吸置いて言った。

「ジョージ。落ち着いて聞いてくれ、それで、襲われ占拠されたのは  
第43ストリートだ」

第43ストリート……俺とデミが担当しているシマだ。……ま、ま  
さか……。先日殺した奴らの一味がっ……！

アマンドの表情とその可能性に気づいた俺は、恐怖で声を引きずら  
せ、今まで信じてもいなかった神に祈り捧げて、デミがしていた様に  
真似て十字を切った、そして恐る恐るアマンドに質問した。

「ああ、そ、それで……？」

「ジョー  
Life's a bitch and then you die.  
人生はクソだ、そして死ぬからな……」

だから、予想していたと思うが、デミ……そしてソフィア、アリスが  
病院に搬送された」

「Jesus Fucking Christ  
「ジザースファッキングクライスト!!!」

2

ジョージとアマンドが急ぎ車に乗り込んで去っていく光景を見送  
りながら、ジボラは母の美貌を受けついた宝石の如くな緑色の目を細  
め、こめかみに皺をよせて、エドナを凝視した。

「ママ……いえ、マダムフアエリ。あの子。ジョージは私が狙っているの。取らないでくださいっ！」

ジボラは、いつものクール口調を崩して強く母に言う。

その後ろにガブリエラが控えていて、ミカエラは未だに子供の分別で忙しくしていた。

「あら、そうと言っても、私も彼を気に入ったし、私が先なのよ？ 娘として譲るべきじゃないかしら？」

エドナは娘をまったく見ずに、米粒の様な小さな光となったジョージとアマランダの車を目で追った。

「いえ、私が彼を迎えに行つたので、私が先でした。それにマダムフアエリには、父がいるじゃありませんか」

「あれ？ 私の記憶違いじゃなければ、あいつは、私たちが話し合つてザイオン共和国に置いたではなかったかしら？ それに、あいつは生殖道具として役に立たないし、もう飽きたわ」

「ですが、アレでも。マダムフアエリの夫には変わりません。神の前で愛を誓つた夫婦です。神への誓いを背き気ですか？」

自分の夫を生殖道具よぼりする母に、自分の父をアレをよぼりする娘の会話を聞きながら、ガブリエラは突如頭痛に襲われた。この母にして、この娘ありだ。

「あら、ジボラ。あなたがそんなに敬虔だと思わなかったわ。だつたらやっぱり、諦めなさい。彼が十字の切つたのを見た？ 彼はクリスチャンよ」

「OK Boomer<sup>老害</sup>。今は何年だと思つているのですか？ ミレニアム・イヤーからもう20年も過ぎてますよ？ 宗教とかそんなの私に気にすると思いますか？」

「黙れ。Zoomer<sup>クソガキ</sup>。私こそ気にしていると思うの？」

「……」

ジボラからの反論はない。エドナは勝ち誇つた視線をジボラに向け、ジボラは相変わらずエドナを睨んだ。沈黙が重苦しく強固に、壁のように続いていく。いつその懐から銃を取り出して、撃ち合うか分からない空気である。



「せん、僭越ながら……」

ガブリエラは、乾いた喉で声を発し、その壁の破壊に挑戦する。もしミカエラがその場に居たら、普段の関係を一時捨てて、ガブリエラの勇気を賛美し、拍手喝采を送っていたであろう（ジボラとエドナの前では出来ないの、心の中であるが）。

「……なに？」

言葉を発したガブリエラに一瞥もせず、二人は睨み合いながら、聞いてきた。

「僭越ながら、ジョージさまを掛けて正々堂々競争をしないかがでしようか？」

「それは、誰が先に彼を手に入れられるか……って事？」

ジボラが聞いてきた。

「はい。そうです」

「うーん。それは……ちよつと、面白そうね」

「確かに、面白そうですね」

「良いわね。私は乗るわ。その話」

「私も乗ります」

エドナが正々堂々他人と競争したがる性格で良かった。ジボラもその性格に似てて良かった。まあ、この性格が災いして、シマ争いに負けて、ファエリファミリーはザイオン共和国から追い出されたのは、口が裂けても言えないが。

「では、マダムファエリ。仄聞ながらアマンダからジョージの時間を買い取ったと聞いたのですが、分けてくれませんか？」

誰から？ そうなような眼差しがエドナからガブリエラに向けられた。ガブリエラは目を地面に落とす、とても自分なのだと言えない。

「なぜ私が、私の金で買ったものを……いや、良いわよ。正々堂々やりましょう？ でも、お前がいつもしている四肢を切り落として、クスリ漬けにするのはダメよ」

「マダムファエリこそ。いつもしている自分以外彼と深く関わった者を暗殺して、金と物で、彼を落とすのをやめてください」

「……う、うふふ」

笑いで二人の協定が合意した瞬間。ガブリエラは、40年代から続き未だ終わりが見えない合衆国と連邦の冷戦の緊張感が、ようやく終わり『鉄のカーテン』が消滅した解放感を味わった気がした。

ガブリエラは笑い合う二人を見つめる。

二人共、人の倫理観から逸脱したサイコパスであると、ガブリエラ自身も当然知っているが、ガブリエラないしミカエラがそれでも彼女らに従うのは、偏に、チトー死後から始まった南スラヴ社会主義連邦共和国の宗教弾圧からザイオン共和国に逃げてきて、その途中で両親は死に、あてもないスラヴ系ユダヤ人である彼女たち姉妹二人を拾ってくれた、エドナへの返しきれない恩義である。

それに、確かにマダムファエリはサイコパスで、裏切り者の家族すら粛清する暴君だが、忠実な部下には洒脱としていて、慈母の様な優しいを見せるのだ。

ガブリエラは心の中で、誰にでもなく言い訳した。